

―― 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。（設問の都合上、文章を省略した箇所があります。）

①平安時代の貴族が創造した二次的自然には基本となる二つの役割がありました。一つは、都や貴族の住まいが自然と調和しているというイメージを創り出す役割です。これと関連してもう一つは、祝儀、吉兆、お守り、厄払い、奉納、供養、そして浄土や、*蓬萊のようないい理想郷と自分たちを結びつける役割であり、両者の役割は互いに関連しあっていました。B、このような二次的自然を創り出したからといって、平安貴族が自然と調和して生きていたわけではありません。A、この二次的自然は、彼らを常に取り巻く危険やこの世のはかなさの代わりとなるもの、また、そうした危険やはかなさから彼らを守ってくれるもの、さらには、そうしたものから逃避する手段として機能していました。

言い換えれば、平安貴族は自分たちが平和な世界に生きているとは考えていませんでした。C、自然と調和して生きているとも考えていませんでした。彼らは自然、特に疫病や死や天災をとても恐れていました。このことは、平安貴族が天災をどのように受けとめたかにはつきりと表れています。彼らは、天災は主に二つの要因によって起ることを考えました。一つは神々の祟り、もう一つは死者の祟りです。*山下克明をはじめとする研究者が指摘するように、『続日本紀』（七九七）では天災を「災異」と表現しています。「災」は洪水、旱ばつ、飢饉、害虫による米の被害を、「異」は日蝕や月蝕、地震、凍てつく寒さ、灼熱の暑さ、さらに怪異現象などを指しています。古代には、天災は人間、特に治世者が誤った行動をした結果だとみなされていました。人間の誤った行動が神々の祟りをもたらすと考えられていました。そのような時には、占い師が呼ばれ、災いをもたらしたのはどの神かをつきとめ、*託宣をとおして神意を探りだしました。それから、怒れる神を鎮めるために、しかるべき儀式が執り行われました。九世紀以降は神々ばかりでなく、怨霊も天災を引き起こすとされました。たとえば、火雷天神となつた菅原道真がそうです。つまり、平安時代の宮廷、貴族の住まい、庭、山の庵では、自然の暗く、荒々しい側面が、調和のとれた平和な二次的自然と共存していたのです。

（中略）

都における二次的自然が、危険に満ちた自然の代わりとなるもの、あるいは自然のもたらす危険からの防御、あるいは逃避であることを理解すれば、②日本における神に対する見方と自然に対する見方との間に明瞭な対応関係があることがはつきりと見えてきま

す。人間からみれば、自然是幸運をもたらすこともあります。日本の地理や気候といった自然は、作物の豊かな実りなどのよいことも、台風や地震などの悪いことも、毎年のようにもたらします。同じように、日本の神にも二面性があります。一つは「和魂」、後世になると「にぎたま」と呼ばれるようになる、徳を備えた温和な側面であり、もう一つは「荒魂」と呼ばれる荒々しく勇猛な側面です。現在（一一〇一〇年）、世界中で猛威をふるつている新型コロナウイルスの流行は、古代の日本で疫病が繰り返し発生していたことを思い起させます。当時（少なくとも八世紀）は、外から入り込んだ疫神みちあえが疫病を引き起こすと考えられていました。そして疫病を鎮めるために、都の四隅、畿内の境、家の門などに道饗えきじんと呼ばれる食べ物が供えられました。疫神は自然の危険な側面であり、鎮め、なだめる必要がありました。D、靈として敬われる必要があつたのです。日本の神は人間を守つてくれることもあるれば、非常に危険な存在となることもあります。ヨーロッパと比べてみると、日本の神は、絶対の善とされるユダヤ・キリスト教の神よりも、善と悪いいずれも行うギリシャ・ローマの神に似ているといえるでしょう。

しかし、日本に生きる人々は自然を恐れていただけではなく、③自然に共感を寄せてもらいます。日本文化に自然の擬人化が広くみられることからもこのことは明らかです。日本文化では自然是よく人間の姿で描かれ、人間のように行動します。こうした例は、和歌、a エンゲキ、物語、民話など日本文化全体に広く見ることができます。現代の「ゆるキャラ」現象もまた、熊や植物などの生き物を擬人化しています。

たとえば、中世における主な自然の擬人化には、少なくとも三種類あります。一つ目は、神や死者の靈が自然の姿、たとえば花や木の精の姿をとるもので、大木、岩、高い山は神とみなされました。神社の境内にある大木は聖なる木とされ、鎮守の森はその地域を守つていると考えられていました。能には、桜や松や藤など、木や植物の精が主人公である作品が多くあります。こうした木や植物の精は人間に語りかけ、自らの b クノウを明かし、救いを求めます。二つ目は「草木国土悉皆成仏」せうぼくこくどしきかじょうぶつという仏教の考え方によるものです。これは植物や動物を含め、すべてのものが悟りを得て、成仏できるという考え方で、中世後期に広まつたものです。これも能の作品によくみられるテーマです。また、中世の説話集やお伽草子などからは、動物や魚を殺したり、さらには大木を切り倒したりすることは罪だと考えられていたことが見てとれます。三つ目は和歌です。和歌は雲や植物や虫など自然のさまざまな要素を用いて、人間の感情を表現します。『万葉集』の和歌にみられる、物に託して自分の思いを述べる「寄物陳思」という表現様式は、

きわめて擬人化された自然観をもたらしました。そして、和歌はその後の日本の古典文学全体の土台となり、中世にも受け継がれました。

(中 略)

今日も行われている供養の一つに、針供養があります。裁縫で使えなくなつた針を供養する行事です。虫や鯨とは違つて、針は生き物ではありませんが、死後も魂があるかのように扱われています。針は人間が作り、使つたという点で、一種の二次的自然とみなすこともできるでしよう。

同じような現象は中世後期にもみられます。当時、捨てられてしまつたり、使われなくなつたりした食器や **チヨウド** などの古道具は百年たつと靈を宿して、人間をたぶらかすようになると考えられていました。そのため、京都では百年たたない古道具を年末の煤払い^{すすはら}で捨てる習慣がありました。室町時代の『付喪神絵巻』では、人間に感謝もしてもらえず、道端に捨てられてしまつた古道具たちが、人間を恨み、④反旗を翻す^{ひるがえ}ことから物語は始まります。しかし最後には、怒れる古道具の妖怪たちは、*護法童子^{ごほうどうじ}によって制圧され、護法童子の言葉に従つて仏道 **シユギョウ** に励み、成仏を遂げます。* 小松和彦^{こまつかずひこ}が指摘するように、室町時代に付喪神信仰が生まれたのは、当時、自然とともに生きる環境から商工業が発達した環境へと移行しつつあったことを示唆しています。人間を脅かす靈が、地震などの制御できない自然の要素ではなく、道具など人間が作りだした文化的な要素から生まれたのであり、これは現代の環境問題の萌芽ともいえるでしよう。

日本における自然の擬人化を考える上で、もう一つの重要な鍵は、⑤近代以前、日本では畜産が基本的に行われなかつたことです。日本は縄文時代以来、植物型の食体系でした。弥生時代になつても、牛や羊は日本に入つてきませんでした。馬や牛が人に飼われるようになり、家畜化したのは、五世紀の古墳時代以降です。農民は田畠を耕すのに馬や牛を用いましたし、武士は馬に乗る必要がありましたので、馬や牛は家畜として飼わっていましたが、食用ではありませんでした。六七五年に天武天皇^{てんむてんのう}が出した肉食禁止令では、鶏も食べることが禁じられました。鹿や猪など野生動物の狩猟は行われていましたが、動物を食用として育て、殺すことはほとんどありませんでした。実際、典型的な里山に牧草地はありません。考古学者の佐原真^{さはらまこと}によると、このような非畜産農業は世界的にも珍しく、これが中国や朝鮮半島の食文化と日本の食文化との大きな違いを生みました。日本には馬などの動物を去勢する技術と知識

が十八世紀までもなく、中国や朝鮮半島と違つて *宦官制度かんがんもありませんでした。一方、植物型の食体系のなかで、植物の品種改良を発達させ、植物と季節に対してきわめて敏感な文化を生み出しました。仏教の影響で日本は非畜産農業になつたのだ、と言われますが、仏教は中国と朝鮮半島にも大きな影響を与えているので、原因はそれだけではないだらうと佐原は論じています。推測ですが、仏教の影響とともに、島国である日本では、豊富な海の幸と山の幸に恵まれた食文化があつたことが関連しているのではないかと私は考えています。E、このような農業や漁業の形態が動物に対する畏敬と共感の念を生み出したことは間違いありません。動物たちは食料というばかりでなく、より大きな環境共同体の一部としてとらえられていました。

自然に対する態度は、共同体や時代や場所によつて大きく異なります。しかし、近代以前の日本では一般的に、少なくとも人間の目から見れば、人間、神、自然の関係がとても近いものだつたので、この三者は互いに重なり合つていました。その結果、自然に対する強い恐怖心と自然に対するきわめて強い親近感が生まれてきたといえるでしょう。⑥現在、そして未来の日本における環境問題を考える上でも、自然や環境をめぐる日本文化の多彩な歴史を振り返ることが必要なのではないでしようか。特に、野生動物から発生した新型コロナウイルスという新たな自然の脅威に直面し、自然との共存のあり方を日々モサクしながら、二〇二〇年という年を生きている私たちに求められていることかもしれません。

(ハルオ・シラネ『四季の創造 日本文化と自然観の系譜』KADOKAWA)

*注 蓬萊ほうらい＝仙人の住む山。 山下克明やましたかつあき＝日本史学者。 託宣たくせん＝神のお告げ。 護法童子ごほうどうじ＝不動明王に仕え、惡を懲らしめる童子姿の鬼神。

小松和彦こまつかずひこ＝文化人類学者、民俗学者。

宦官かんがん＝去勢された官吏。

問一 a 、 e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 A E に入る言葉として適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ言葉を二度以上使つてはいけません。

ア むしろ イ つまり ウ しかし エ いずれにせよ オ また カ さて

問三 線部①の「二次的自然」とはどのようなものですか。解答欄に合うように、本文から四十五字以内で抜き出し、最初と

最後の五字を答えなさい。

問四 線部②で「明瞭な対応関係」とあります。人間に對してどのような点で「対応」していると言つてているのですか。次の二文の I II に十五字以内で適切な言葉を入れて、答えなさい。

・日本の神が I 存在でもあるという二面性を持つのと同様に、自然が II という二面性を持つ点。

問五 線部③とあります。どのようなところから日本人は「自然に共感を寄せて」いると言えるのですか。「擬人化」の例をもとにして説明しなさい。

問六 線部④と似たような意味を持つことわざ、もしくは慣用句として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 目には目を歯には歯を イ 弓を引く ウ 寝た子を起こす エ 白旗を掲げる
オ ミイラ取りがミイラになる

問七　——線部⑤とありますが、「日本では畜産が基本的に行われなかつた」ことが、食文化以外にどのような影響をもたらしましたか、説明しなさい。

問八　——線部⑥とあります、「なぜ「環境問題を考える上」で「歴史を振り返ることが必要」であると言えるのですか。筆者の考え方として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　環境破壊は、人間が神や自然を制覇した証しあかであり、環境問題を解決するには自然を管理して共存をはかる必要があるから。

イ　商工業が発展してきた室町時代から、環境問題が始まっていたことを自覚して、自然との関わり方を見直す必要があるから。

ウ　現在の環境問題を生み出してきた近代以降の生活を捨て去つて、自然と共存していた過去の生活を取り戻す必要があるから。

エ　環境破壊を前にして、自然との新しい共存のあり方を模索するためには、自然に対し謙虚な気持ちに立ち戻る必要があるから。

オ　昔から工夫を凝らして環境問題を解決してきたため、新しい共存のあり方を考えるには今までの経験を活かす必要があるから。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある時、都の鼠、片田舎に下り侍りける。田舎の鼠ども、①これを*いつきかしづくこと限りなし。これによつて、田舎の鼠を召し具して*上洛す。しかもその住所は、都の*有徳者の藏にてなんありける。かるが故に、食物足つてぞしきことなし。都の鼠申しけるは、「上方にはかくなん②いみじきことのみおはすれば、いやしき田舎に住みならひて、何にかはしたまふべき」など語り慰むところに、家主、藏に用あることあつて、にはかに戸を開く。Aの鼠はもとより*案内者なれば、我が穴に逃げ入りぬ。Bの鼠はもとより無案内のことなれば、あわて騒ぎて隠れところもなく、からうじて命ばかり助かりける。その後、田舎の鼠参会して、このbよし語るやう、「*御辺は都をいみじきことのみありとのたまへど、ただ今の氣づかひ、*一夜白髪といひつべく候ふ。田舎にては事足らぬことも侍れども、かかる氣づかひなし」となん申しける。

そのbとく、③いやしき者は、上つ方の人にもなふことなけれ。

(『伊曾保物語』)

*注 いつきかしづく=大切に世話をすること。
案内者=事情などをよく知る人。
上洛す=地方から都に行く。
御辺=あなた。
有徳者=裕福な人。金持ち。
一夜白髪=心配・心痛のために一夜で髪が白髪となつてしまふこと。

問一 A、 Bに入る適切な語を、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 都 イ 田舎

問二 二 線部 a 「故」、b 「よし」の意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 「故」
〔ア 縁 イ 趣 ウ 身分 エ わけ〕
b 「よし」
〔ア 長所 イ 様子 ウ 事情 エ 結末〕

問三 一 線部①の指示内容を答えなさい。

問四 一 線部②とはどういうことですか、十五字以内で具体的に答えなさい。

問五 一 線部③の筆者の考えについて、以下の問いに答えなさい。

(1) I 「いやしき者」、II 「上つ方の人」はたとえ話では何に当たりますか。適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 都の鼠 イ 田舎の鼠 ウ 家主

(2) 「いやしき者」の生活にとつて、どんなことが大切だと言つてゐるのですか。三十字以内で答えなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（本文の表記を一部変更し、また訓点を省いた箇所があります。）

じょたい
徐泰は幼い時に父母を亡くし、叔父である徐隗に大切に育てられた。そんな叔父が病気で寝こんでいたある夜、泰は不思議な夢を見る。

*注 嘉興＝地名。 所生＝実子。 営侍＝そばについて世話をする。 三更＝夜中の十二時頃。

床頭＝枕もと。

叩頭＝頭を地につけてお辞儀する。 思得＝思いつく。 張隗＝人名。

問一 ＝線部 a 「甚」、b 「即」の読み方を送り仮名も含めて平仮名で答えなさい。

問二 ＝線部①、⑤の「之」は本文中の誰を指していますか。適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 徐泰 イ 父母 ウ 徐隗 エ 二人 オ 張隗

問三 ＝線部②は「帳簿」のことですが、これにはどういうことが書かれていたのですか、具体的に答えなさい。

問四 ＝線部③は「張隗なるもの有り、徐を姓とせず。」と読みますが、これに従つて返り点を付けなさい。ただし、送り仮名は不要です。

問五 ＝線部④について、以下の問いに答えなさい。

(1) 書き下し文にしなさい。

(2) これは夢に現れた「二人」が「張隗の命を強引に奪っていく」ということを述べていますが、なぜそのようなことをするのですか。「二人」の考えを答えなさい。